

第2回モンタナ研修 サマープログラム実施される

今夏、「第2回モンタナ研修サマープログラム」が実施された。今回の派遣学生は、男性6人、女性6人で、前回に比べて参加人数は減ってはいるが、参加学生は半年も以前から英会話の訓練を受けこの夏に備えていた。モンタナ州内での研修は、前回とほぼ同じものであったが、ほとんどの学生にとっては初めての海外旅行であり、モンタナ州ではロサンゼルスなどの都会と異なった広大な原野を眼の当たりにして、色々な思いがあったと思われる。ここに研修団を引率された堀治美先生と学生の手記を紹介する。



「カウボーイ精神」の国研修記

だまし

教養部助教授 堀 治 美

まず最初に、私たち一行の41日にわたるすばらしいモンタナ研修旅行を可能にして下さった、日米すべての関係者に心から感謝を述べさせていたきたい。

さて、私たちが最初に訪問したのはミズーラにあるUM(ユニバーシティ・オブ・モンタナ)である。キャンパスには、夏の光を溢びた鮮かに透明な緑が拡がり、乾燥した大地に撒かれるスプリンクラーからの霧状の水滴が、扇形を描いて、芝生の上に宝石でも敷いたようにきらきらと光っていた。学長、副学長、それにマンスフィールド・センター長及び関係者の方々が、温かく、厳かな歓迎式をして下さった。マンスフィールド・センターには東洋研究所があって、東洋研究に力が注がれているようである。図書館地下には、東洋関係資料、美術品の展示室もある。親日家の教授が何人かいて、私たちを手厚くもてなして下さった。乗馬も経験できた。(熊本では馬を食べてしまうのだが!) UMはMSU

(モンタナ・ステイト・ユニバーシティ)と同じく州立大学で、学生数は9,000人位、MSUよりは少し小規模ではあるが、両者はモンタナ州では双璧を成す大学として、優位を競い合っているようである。

その後、州都ヘレナにあるカトリック系の私立大学、キャロルカレッジを訪問。小高い丘の上に学生寮とは思えぬ美しい建物が、そびえるように立っており、その右手には、司祭や僧侶になる男子学生だけの寮がある。キャンパスを一回り案内してもらおう。徹底的な手造り教育をやっているという印象を受ける。図書館も小さいが、コンピューターで全米の図書館とラインが繋がれ、必要な本や文献は、容易に入手できるようになっているとのことであった。

ヘレナでは州知事を表敬訪問し、さらにビュートへ向かう。ビュート鉱工科大学では、副学長から歓迎のご挨拶をいただき、鉱物関係の博物館の案内を受ける。鉱物資源の豊か

なモンタナの一面を認識するには、恰好の機会であったと思う。アナコンダがかつて所有していたというアメリカ最大のピット（石炭採掘場）も、見学の機会に恵まれた。

MSUを訪ねてポーズマンに着く前に、私たちがおこなった、忘れられないことは、グレイシャー・パークのハイキングであった。標高2,000 m位の山腹をはしるトレイル（山道）を26 Km歩き抜いた。その自然の壮大さと美しさには驚嘆してしまった。MSUの交流担当教授リー先生は、これを我々は“grandeur”と呼びますよと誇らしげに言われる。まさにその通りだと思った。

この広大無辺なアメリカの大地で生きるには、厳しい自然状況と闘わなければならない。どう猛な野獣もいる。日本のようにすぐ隣に人々がいて、助け合って生きていけるわけではない。要は、アメリカ人は一人で立って、一人で生きていかなければならない。この「頼るべきは自己のみ」というアメリカ人の精神の核を肌で感じてもらうために、このハイキングを計画したと、リー先生が後で話された。この精神は、かれらがヨーロッパから自由の天地を求めて新大陸に来たときにまでさかのぼる。この荒野で鍛えあげられたアメリカ人の『個人主義』に、重い実感が与えられた貴重な体験であった。

この体験以来、私たちは何かにつけ『個人主義』を考えさせられた。講義を通してこのことを教えて下さったのは、国際教育部門のチーフであるドナルド・クラーク先生であった。日米両国における政治形態の相異を『合意』と『妥協』を基礎に述べられた。アメリカでは政府の決定に関して、徹底的に闘

い、反目し、ついにはやむなく妥協する。ところが、日本ではつねに『調和』を大切にし、皆が『合意』に達するまで待ち、闘わずに、同意に至ると。アメリカでは『個』が最優先され、『個』が自己を鋭く主張するのに対し、日本では『和』や『協調』を重んじると。

マイク・マローン先生はアメリカ史を講じられた。おもしろかったのは、今でもアメリカ人の理想として「カウボーイの精神」が息づいているということである。カウボーイであるためには4つの条件を満たす必要がある。まず第1に純粋であること、第2に勇敢であること、第3に女性にいちゃいちゃしないこと、第4に飲んだくれでないことだそう。そしてレーガン大統領は、つねにカウボーイであろうと意識的に振舞っていると。私の目にアメリカ人が、非常に健康的な国民だと映ったのは、この辺に原因があるのかもしれない。

MSUでの3週間あまりの寮生活は、大学の食堂で食事をし、講義を受け、小さな旅行をし、スポーツをし、時にはパーティーに出るという生活であった。アメリカ人は知性と肉体のバランスが実によくとれているというのが、強い印象である。自然と触れ合い、そこから喜びを与えられて生きていたと思えた。川遊びをし、キャンプをし、ドライブをして楽しんでいる。知的活動と肉体活動の切り換えが実にうまいことに感心し、私もライフスタイルを少し変えなければならぬと思い始めている。

MSUの学生達は経済的に自立していることが多いらしい。遊びのためではなく、学費のために夏はアルバイトをし、大学と社会を自

由に往来している。いったん社会に出て、大学に戻ってくる学生も多い。既成の枠から自らを自由にして、实际的、機能的に動いている社会のようである。

アメリカほど一般化するのが難しい所はないであろう。モンタナとカルフォルニアでは完全に事情は一変する。私たちが見たのは、アメリカ50州の1つ、モンタナ、それもボーズマンという人口3万人の小さな街。だからアメリカを語ることはできない。しかし、少くとも4週間にわたり、モンタナの人々と触れ合い、語り合い、さまざまな違いを発見した。この相違を認識した上で、相互受容をしていかなければならないと思う。学生達も企業体験やホームステイを通して生きるということに対して、新しい視点を得たようである。

ボーズマンの夏の美しさ — 白いポーチのある大学近くの家並みや、今まで見たこともない鮮烈な透明な緑 — は、私たち15人の心の中にいつまでも輝き続けることであろう。

モンタナサマー プログラムに参加して

教養科1年 森 崎 美津子

あっという間に40日間を、過ごしてしまったなあという感じです。アメリカは、全てがダイナミックで、驚きの連続でした。食事の量も大変多く、そのせいか、アメリカ人はみんな大きくて、私たちが小さく見えました。又、アメリカの学生の通学は、徒歩か自転車で、バイクの流行している日本の学生の通学とはまるで違っていました。

これはアメリカ人全てに言える事ですが、アメリカ人は、大のスポーツ好きです。ハイ

キングやランニングをしている姿を、よく見かけました。体を鍛え、毎日を楽しく過ごします。日本とは違い、食事には時間をかけません。ハンバーガーやサンドウィッチ、ホットドッグが、最もポピュラーな食べ物でした。

さて、モンタナでの寮生活はというと、殆どの学生は帰省していましたが、サマークラスを受けている学生達が同じ階に残っていて、よくおしゃべりをしました。時々、ピザをごちそうになったり、手作りのパンケーキを食べさせてもらったり、最後の日は、カレーを作って、みんなと、カレーパーティを楽しみました。

モンタナで、忘れられない思い出の一つは、グレーシャーパークのハイキングです。とってもきつかったけれど、あの自然の美しさは決して忘れられません。又、企業ステイや、ホームステイでのホストファミリーと過ごした一時も、忘れられない思い出の一つです。モンタナを発つ日は、フェアウェルパーティまで開いて頂き、“SAYONARA”の言葉に添えて、私達の一人一人の名前を入れたケーキをごちそうになりました。お世話になったリー先生や、学生のトム達と別れる時は、さすがに、泣いてしまいましたが、本当に、モンタナに来て良かったという満足感で一杯でした。そして又、機会があれば、いつかモンタナに旅してみたいと思っています。

モンタナを発った後、私達は、サンフランシスコへ向かいました。サンフランシスコのダウンタウンの町並みは美しく、ショッピングには最適の場所でした。街角では、サクスを吹いていたりと、ダウンタウンの中央をケーブルカーが忙しく動いていたりと、見て

いるだけでも楽しくなってしまうといった感じでした。次の目的地は、ロサンゼルスでした。ロスは治安が悪く、様々な人種が入り乱れていました。ロスと言えば、本場のディズニーランドがある所です。おとぎの国ディズニーランドには、沢山の乗物があり、愉快的なショーもあっていました。又、UCLA、サンタモニカ、ユニバーサルスタジオも見学出来、楽しい日々を送りました。夜は、熊本県人会の皆さんと交歓会が行われ、今、留学しているキタズミコウイチさんの手紙を披露して下さいました。彼のお父さんや、妹さんともお会いしました。

最後の目的地、ハワイでの3日間もまた、愉快的日々でした。毎日、ワイキキの浜辺に横たわり、真っ黒に日焼けしました。ビーチには、現地の人や、旅行者の人達の姿も見られ、皆んな思い思いにファッショナブルな水着を着て、夏のバカンスを楽しんでいました。ハワイを発つ前夜、サンセットクルージングのオプションツアーに参加しました。約3時間の間船で海を回りますが、船の中で、サンセットを見ながらのディナーもあり、ロマンティックな気分になりました。ディナーの後にはショーがあり、ダンスがありと、皆んな最後の夜を多めにエンジョイしました。

このように、アメリカの中でも、4カ所を回って見て、それぞれの良さを感じました。場所によって、人間の層も異なっており、おもしろかったと思っています。これからは、もっと英語を勉強し、それ以上に日本について勉強してゆきたいと思います。そして、このプログラムに、一人でも多くの学生が、参加出来ればいいと思います。



グレーシャー国立公園にて

モンタナ研修を終えて

経営学科2年 戸澤みどり

第2回モンタナサマープログラムを終えてみて、アメリカの印象を一言で表わすならばBIG。モンタナの人達はどうかというとFRIENDLYの一言に尽きると思います。

私は出発前の講義でモンタナは本当のアメリカ、アメリカの精神が今でも残っている所であると聞いていましたが、私はアメリカというとニューヨークやロスなどの印象が強かったので、モンタナに到着してすぐはそれが何なのか理解できずにいたのですが、グレーシャーナショナルパークでは若い人達ばかりでなくお年寄りまでもが23キロもあるあの道りをハイキングしているのを見、また自分があの道りを実際に歩いてみて、そして大学での講義を通してそれがCOWBOY精神、開拓者精神であることを知りました。

彼らは大変タフで、ハイキングを好みますがそれは日本で通常行われるハイキングとは全く異なり大変長い距離です。しかし彼らは楽しそうに疲れなど全く見せません。これは

日本人側からすると本当に自分との闘いで途中で歩くのを止めてしまいたいと思ったことも何度もありましたが、歩き終えた今、彼ら自身には知らぬ間に身についた精神を私達もほんの一寸ですが感じる事ができましたと思います。

私達は夏休みを利用してのプログラムであちらの学生達との接触は殆ど無かったのですが、企業ステイやホームステイそしてパーティなどを通して人々の個人主義国アメリカの一部を見ることができたと思います。私達は企業ステイは始めてメンバーと分かれて、自分独りで誰の力も借りずにそれぞれが自分の置かれた場所で生活するという事で誰もが不安で心細い反面、期待と希望を抱いていました。私のステイした所はメンズ服の卸売店で色々スーツやシャツなどのサイズや選び方等を教えてもらい、ボーズマンの商店街の会議にも同行させて頂きました。初めはただ Yes, OK, I see こればかりで話したい事が言えず辞書を片手に話をしていましたが、ホームステイの頃になると生活にも慣れて多少単語が分からないこともありました、説明してもらって理解して日常会話程度なら少し話せるようになりました。

最初着いたばかりの頃は相手の問いかけもいろんな案内などにアンテナを向けて理解しようと努力するのですが、単語が一語分からないとその事ばかり考えているうちに話は先に進んでいて結局何を言っているのか分からず、ちゃんと聞き取りたいという思いがいつもあって先生方の日本語の会話までもが英語に聞こえてきたこともあり、又自分の考えなどを話しても変に日本語で考えたりするので相手

に通じなかったりして大変恥ずかしい思いをしたり、落ち込んだりしたことも数えられない程ありました。しかし、そんな私達でしたがモンタナを出発する時にはその生活にも慣れて、まだ日本に帰りたくないというのが私達みんなの共通の思いであったと思います。

私達が触れ合った人達は誰もが親切で、大変人なつこくジョークの連発で、いつも人を楽しませようと気を配ってくれていました。しかし、突然日程の変更があったりして戸惑うこともあったのですが、あちらではこんなことは通常でその流れに抵抗なく対応し物事に対する切り換えが上手で自分の置かれた時と場所において一生懸命情熱を燃やしている。

私は彼らのこの様な生活の仕方が大変合理的で好きです。40日間という長い様で短い旅でしたが、このことは私達の人生において一生忘れることの出来ない金の思い出として残ることと思います。本当に本当にありがとうございました。

モンタナ研修を振り返って

図書館 上田 信行

今夏第2回モンタナ研修サマープログラムに、引率者の1人として参加する機会を得たので、感じたままを率直にご報告してみたいと思う。

我々の研修はワシントン州のシアトルから始まったのだが、シアトルでは航空券のキャンセル、トランクの積み残し、ミズーラでは学生の連絡なしの行動等、最初から予期せぬ出来事が幾つか続いて、引率者一同はこの先の長い旅路を想い、内心では憂慮するものが

あった。また、モンタナ州滞在中の行動は、バスによる長距離移動ではあったが、数人の学生はバスの中で、朝からぐったり眠っているような様子で、受入側のリー先生や、ライリー先生達をがっかりさせはしなかっただろうか。それから、引率者に現地でモンタナ滞在中の行動予定表を渡されたが、それでもずい分と変更があり、細かい点について学生への連絡が予想以上に大変であった。

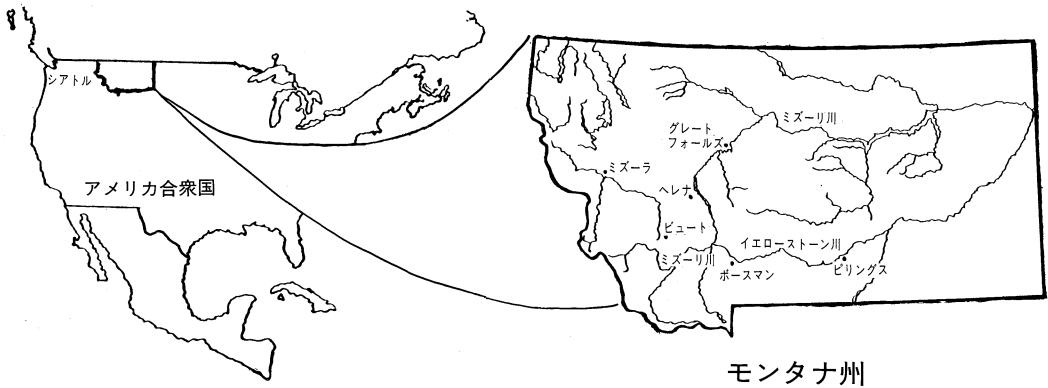
今回はモンタナ州立大(MSU)の他、6校を訪問の予定であったが、2校は先方の学長と事前に連絡がとれず、訪問できなかったし、この他2校は僅か1時間位の滞在で、挨拶する程度のもので全くの駆け足訪問に終わった感がする。更にもう1校は、1日ばかりではるばる訪問に行ったが、本学と交流担当の教員・職員は無論、誰一人挨拶に来られた人もなく、学生寮で1泊しただけで、全くの意外さにただ啞然としただけだった。だから、実質的には、2泊3日滞在したモンタナ大(UM)と23日間滞在したMSUの2校との交流であったと言っても過言ではない。従って次回は、単なる形式的な訪問に終わらないよう、MSUとUMの他、もう1校位に訪問大学を絞ったほうが良いのではと思う。そして1校につき最低3日程度は滞在できるよう計画すべきだろう。

MSUにおける英会話授業や4回の特別講義等については、学生は積極的に質問し、講義担当者には、彼らの旺盛な学習意欲を印象づけたようだ。学生と共に授業に参加し、時間が足りないと感じた程であったからである。これは昨年からのモンタナ事前研修(英会話、モンタナ事情説明会等々)の成果の1つと言

えるだろう。そしてMSUの受け入れ側の負担も考慮して思う事であるが、学生の企業体験入社は、何とか学生の期待に添えるようにはなかったものの、民泊が1家庭に2人づつ位になってしまい残念に思った。このインターンシップとホームステイは、何と言ってもこのサマープログラムの中心である。素通りするだけの単なる外国観光旅行では、決して得られないモンタナの人々との直接の交流が得られるからである。実際の対話を通して、意見の交換、生活や考え方等の文化的な相互の類似点、相違点をしっかりと認識し、理解しようと努力することなしには真の国際交流はありえない。MSUの受け入れ担当の方にも、こういう考えや希望は早めに、明確に連絡しておくべきだと思う。

帰路、ロサンゼルスでは、南カリフォルニア熊本県人会の方々との意見交換会、懇親会があり、多民族国家のアメリカが抱えている光と影の現実社会の一端を目の当たりに見聞し、全くモンタナとは異質なもう1つのアメリカ社会を観察することができたと思う。

今回のモンタナ研修を通じて、学生はアメリカ社会の個人主義、合理主義、基本的な物の見方、行動力、計画的な町造り、競争社会の厳しき、そして日本が誇りにできる点等々も各自大いに学べたことと思う。最後に、本学学生のモンタナの人々との積極的な交流姿勢は、特筆できるものがあった事を付け加えたい。そしてこの貴重な体験を自分なりに消化し、栄養となし、人間的に一回りも二回りも大きく育ってもらい、今後は個人的に国際交流のより良き理解者として、その輪を広げて頂きたいと思う。



研修プログラム

参加学生

- 〔日程〕
 昭和61年7月17日～8月26日 41日間
 第1週 アメリカ・ワシントン州シアトル着。
 シアトル市内見学。ボンデパート見学。
 モンタナ大学訪問。
 マンスフィールドセンターで講演会。
 グレーシャー国立公園にてオリエンテーション。
 ヘレナで州知事表敬訪問。
 キャロル大学訪問。
 モンタナ鉱工科大学訪問。
 ビュートの銅山見学。
 第2週 モンタナ州立大学キャンパス見学、歓迎会、スポーツ、英語研修、講義。
 第3週 ビリングス市訪問。東モンタナ大学訪問。
 週末は川下り。大学寮滞在。
 モンタナ電力会社見学。
 第4週 モンタナ州内の企業で研修。
 イエローストーン国立公園見学。
 第5週 モンタナ州立大学にて英語研修、講義、スポーツ。
 鐘乳洞見学。バージニアタウン見学。
 ホームステイ。お別れパーティー。
 第6週 サンフランシスコ観光。
 ロスアンジェルス観光。
 南加熊本県人会との交歓会。
 ハワイ観光。

- 〔熊本商科大学〕
 商学部 商学科 4年 伊勢野 郁 雄
 3年 高 橋 裕 幸
 3年 渡 辺 清 隆
 2年 米 丸 ユカリ
 経営学科 2年 白 木 隆
 2年 戸 澤 みどり
 1年 菊 川 洋 輔
 経済学部 経済学科 1年 田 中 久 博
- 〔熊本短期大学〕
 教養科 2年 尾 方 ますみ
 2年 江 藤 麻 里
 1年 原 田 喜美子
 1年 森 崎 美津子

- 〔引率者〕
 堀 治 美 助教授
 慶 田 收 助教授
 江 島 和 広 総務課
 上 田 信 行 図書館

韓国との学生交流始まる

—大田大学をゼミ研修旅行で訪問—

去る9月18日から23日にかけて、岩野教授担当の演習（国際金融論）の学生38名が、韓国へ研修旅行へ出かけた。

この研修旅行の行程のなかで、本学の10番目の姉妹校である大田大学を訪問し、韓国の大学生との交流を深めた。

この姉妹大学訪問の計画は、昨年、北古賀学長が大田大学を訪問した際に、今後の両大学の交流プログラムの具体的な話になり、教員の交流は、この4月から開講された韓国語講座の講師を大田大学から派遣していただくこと。学生の交流は『是非、貴学の学生が本学を訪問できますように』という大田大学学長の強い要請により、北古賀学長が『今の段階で、モンタナと同じように数週間に渡る研修団の派遣は無理だが、本学には国際経済や国際金融などの講座があり、その講座の演習の参加学生に関心があれば、国際経済の実地研修ということで貴学を訪問させることはできる』と返事をされ、学長が帰国後、国際金融論演習担当の岩野教授に相談がなされ、この4月から岩野教授が準備をされ、今回実現の運びとなったものである。

本学学生が正式に、大田大学を訪問するのは今回が最初であるため、交流開始の意味と本学学生のホームステイを引き受けて頂いた御礼の意味での学長の親書を持参する事務職員1名が同行した。

9月20日の大田大学訪問では、盛大な歓迎を受け本学学生も大田大学の学生と友好を

深めた。学生の印象としては、大田大学の学生はよく勉強をしていること、特に英語に関しては自分達より遙かにでき、日本の多方面に渡る実情に対して詳しい知識を持っていることに驚いたようだ。それに比べて自分達が韓国の実情について殆ど予備知識を持たずに研修旅行に参加したことを認識させられたようだ。

とにかく大田大学の学生は勉強熱心だとの印象が強く一番近い外国でありながら、その国内事情を殆ど知らないことを痛感し、国際交流の必要性和外国語を身につける必要を感じたようであった。

研修旅行に参加して

経済学部3年 関戸裕信

私にとって初めての海外旅行であった。旅行中、天気恵まれなかったのが残念であったが充実した旅行だった。まず釜山に上陸したが、この都市は韓国第二の都市だという。街を歩く人々は日本人となんらかわりがない。まったく同じ顔をしている。しかし、彼らにはどこか緊迫感が感じられるような気がした。韓国人は一重瞼が多く比較的目が細いせいもあるのかもしれないが、それだけではない。彼らは国家を背負っているという誇りに満ちている。ゆるんだ顔をして歩いているのは大抵が日本人観光客である。街中で軍の装甲バスをよく見かけた。また、道路が非常に広

いのは飛行機が発着できるためであるという。月に一度は都市ぐるみで軍事訓練があり、徴兵制度がある。一般市民が有事の際には兵士として戦わなければならない。私がホームステイで泊めてもらった朴豆珍君も例外ではない、私たちと同じ大学生もまた徴兵として国家のために戦わなければならない。

朴君は日本語が上手で大まかな会話は日本語で済んだ。しかし、彼の弟さんは日本語が話せず、きれいな英語で私の目をまっすぐに見て話しかけてくる。その目のかがやきが非常に印象に残っている。日本人ももっと相手をまっすぐに見て臆することなく会話する習慣をつけるべきだと思った。この日はアジアゲームの開会式であった。日本選手が韓国旗を振って行進しているのを日本人である私が韓国人の茶の間のテレビでみるのは不思議な気がした。同時に、両国間の歴史の重みを感じた。彼のご両親が片言の日本語で私の父親の生年を聞かれた。1940年（昭和15年）生まれだということ、「それを聞いて安心しました」とポツンと言われた。そして、「あなた方が韓国語がわからないように、私たちもわからない他国の言葉しか話せない時があったのですよ」私は何と答えていいのかわから

ずにとっさにうつむいてしまった。すぐにまっすぐに彼らを見たが、その後、一言も口から出なかった。

朴君の家へ行く時はドシャ降りの雨だった。大きな荷物をもってバスに乗り込んだ。すかさず見知らぬおじさんが親しく韓国語で話かけ、ハンカチをだして濡れた服を拭いてくれ、席を譲ってくれた。とても親切である。座っている子供が遠くに立っている人に席を譲る。あたりまえの親切があたりまえのようにおこなわれている。

出国審査の時にパスポートを手渡すと審査官はSWIMMERと書いて私をなかなか通してくれない。どうも水泳の関戸直美選手のことをいっているらしい。意味がなんとなくわかって相づちを打つと彼はパスポートを返してくれた。私はそのとき自然にカムサハムニダ（ありがとう）と口から出た。気むずかしそうな審査官から笑みがこぼれた。名所や旧跡を見てまわるよりもほんのささいなことであっても、言葉がよく通じない人々と心をかよわせることができると本当によかったとこの時あらためて思った。近くて遠い国といわれていた韓国は、いま近くて近い国となってきていると聞く。

「カムサハムニダ」

総務課 星子三郎

京釜高速道路から一望する大田市の町並みのなかに、初めて訪れる大田大学をさがしながら、やはり緊張感・不安感を覚えた。

山手にやや坂道を登り詰めると写真でみた目指す大田大学が静かなたたずまいをしてい



大田市にて

る。昨年6月姉妹校調印式に来学された理事長・学長諸先生方が笑顔で御迎えいただいた時、すごいなつかしさを覚えた。教職員・学生の皆様が盆休みにもかかわらず参集され、両国国旗、歓迎の横断幕が準備された交歓会場は150名程に埋まった。両国国旗へ国民儀礼としての敬礼に始まり、金麟済学長、総学生会長の心からの歓迎挨拶、岩野教授、切通君（ゼミ学生代表）の韓国語での切々たる訪問挨拶と進み姉妹大学間の交流の歴史は着実に厚みを増した感がある。学生会館のホールではチョゴリ衣装のサークル学生が奏でる韓国古典音楽に興奮し、また公州博物館では、しばし古の百済文化に酔いしれた。その後、降りしきる雨の中夕刻の7時に、大田駅前ホームステイ分散と相成った。

土砂降りの雨に本学学生の緊張の表情はかき消されがちであった。いよいよ学生個々人

が、本領を発揮する訳であるが時節柄少々心配はあった。すべては大田大学におまかせする以外にない。

一晩明けて、三三五五と再び大田駅前に集合（のんびり集合）する学生の顔は笑顔、笑顔。見送りの学生との笑談、写真を撮り合う学生とそれぞれに絵になっている。「りっぱなもんだ。さすが商大生」と拍手を送りたい。大田大学との姉妹校関係は十分に前進できると確信する。金学長は私達のバスが動き出す直前に小走りでバスに乗り込み再び「さよなら」と言葉をかけられた。「また会いますよ、皆んな元気で頑張ってください」の意味をひしひしと感じた。それから数時間、昨夜の寝不足を忘れホームステイの興奮をそのままに学生達は語り合っている。一生忘れ得ない外国体験であったろう。大田大学の皆さん「テラダニカムサハムニダ」

姉妹大学の教授

本学滞在印象記



熊本商大の印象

大田大学教授

金 寛 洙

大田大学が熊本商大と姉妹関係が結ばれて、九州地方では二番目に開講された韓国語講座に私は招聘教授として選ばれ、初めて講義を担当し半年間の一学期を無事に終わるようになりました。これは開拓者としての私に対して、北古賀学長先生を中心にして全教授が一致協力してくれたおかげだと考えております。また、私の専攻ではありませんが、韓国語を

熊本商大の学生達に教えながら、韓日間の理解を日本の大学生と議論することができたのに対して、後悔なしの授業と満足しております。私は教育に対して次のような信念を確信しております。教育内容として知識と内容は事実上一つの手段ですし、目標は教授と学生相互間の人間的人格の交換です。私はこのような教育哲学を持って学生に教えました。其中で忘れる事ができない印象は次の点です。

1. 熊本商大が国際的理解に関して立派な関心を持つことに対する印象です。海外事情研究所または国際交流室等の機構を持って世界各国の事情の資料を収集し、学問的方向で

量的、質的に深い理解を持つことに対して感銘が深かったのです。特に交換教授が住むアパートの施設と家財道具の準備等の緻密性に驚きながらも感動しました。

2. 熊本商大は本当に立派な学風を樹立発展させておりました。南国的な植物の緑が美しいCampusに適当に配置してある立派な校舎で、研究または講義をなさる其の姿は教育場の楽園でした。特に研究棟は研究室にあてはまる立派な雰囲気だったし私が使いました教授研究室204号で見た大学Campusは生動しておりました。

3. 北古賀学長先生の大学運営哲学と浩浩揚揚な人品が印象的でした。招聘教授の私の立場で個人的なことを質問した時、いつも御笑顔で「研究してみましょう。」のお答は学長先生の徳望を十分に感知する事ができました。100名に近づく教授と5,000名を越す学生達が大変喜ばしく研究または勉強するように指導なさるご指導力量が本当に豊富でした。

4. 私の韓国語受講生達の立派な受講態度でした。初めて開講した韓国語でしたが熱心に勉強してくれ、一学期末頃は $\frac{1}{3}$ 程度が簡単な意志疎通が可能でした。また韓国の歴史と文化にも関心を持って質問するし勉強しようとする態度を見せてくれました。これを通じて熊本商大生達の学究態度が立派だということをわかるようになりました。このような学風は教授達の人格と学生達の学究熱が結合して作られた結果だと考えられました。

もう一つは、熊本商大の国際交流事業と方針に対する意見です。熊本商大は韓国の大田大学とAmericaのMontanaの大学と姉

妹関係を結んでおりますがMontanaの大学とは数年間交流しておりますので、深い米日関係の中で十分な理解ができていると考えておりますが、東洋文化の同一な地域の韓国は、日本文化と習慣の差異が大きなものではありません。西洋人は個人主義的なので私生活に干渉するのをきらいますから無関心するのが通じますが、東洋人達は訪問客または来訪人達に関心を持ってくれる、人情を必要とする点です。習慣が違う日本生活により適応しておるかどうかを時たまに電話等を利用して確認してくれる人情が安定感を要求する交換教授には特に必要でしょう。

(この印象記は金先生が日本語で書かれたものです)

[金寛洙教授の紹介]

金教授は、本学がこの4月から開講した「韓国語」講座の講師として姉妹大学の大田大学から招聘した教授である。専門は生物学、滞在期間は4月～7月。

日本の印象

—異文化理解への道—

キャロル大学助教授

フィリップ・ウィットマン

たった4カ月の滞在で日本についての印象をまとめることは難しい。まだ日本について感情的になっている面もあるからだ。感情的に強く思い入れている場合、事実を適確に把握する時とは異なった物の見方をしてしまうことがある。

異文化と接する際、誰しも3つのステップを経験するのではないだろうか。最初、その文化に魅了されてしまう。見るもの聞くもの全てがエキゾチックで異なって見える。その



うちに、その文化の悪い面が見えてくる。そして最後に良い面、悪い面、両面からバランス良くその文化を見ることができるようになる。

私は今、日本社会をバランス良く見ることが出来るようになったと感じている。伝統的な社会の中で暮らしてみることにより、私自身のアメリカでの生活について、これまでとは異なった観点から再考するようになった。これまで見えなかったものが見えてくるプロセスこそ、教員や学生の交換が目指す所ではないだろうか。違いに気付くことにより、感受性は豊かになり、相互理解への道は開かれる。

ここで日本文化の2つの特性について述べたい。第1に、日本のグループ(集団)主義についてである。グループの中での日本人の人間関係について以前よりも理解ができるようになった。これはアメリカ人の行動様式とは非常に異なっている。恩と義理は、多くの伝統的社会においてと同様、日本においても非常に強調される。この利点は、皆で協力することにより、家族的雰囲気を作り上げられることである。西洋人の目に不利な点と映るのは、社会の中での協調性を重んずるあまり、個人の自由が侵される傾向である。西洋人は個人の自由が侵されるのを非常に嫌う。私はグループ主義の利点と不利な点の両面をよりはっきり認識できるようになった。

第2に、いわゆる「日本文化の特異性」について述べたい。日本人は今でも西洋人は自分達を理解できる筈はない、同じ食べ物を食べることはできない、日本語は話せない信じ込んでいる。私は日本人の友人と食事によく行ったが、給仕は私には日本語で話しかけようとさえしない。日本人にしか話さない。

すなわち外から来た人は日本を理解する能力が殆ど欠如していると考えているようだ。もちろんこの見方に私は反対だ。多くの外国人は日本および日本語に対して関心を持っているし、それを理解する能力も持ち合わせている。確かに日本の特異性は存在する。しかし、変化は着実に起こりつつある。

熊本とモンタナの交換プログラムは、日米両国民がお互いに理解し得ないという誤った仮説を是正するのに大きな役割を果たし始めた。これらの交流により、我々は、日本人はアメリカでも十分生活していけるし、英語も話せる(これまで、日本人は英語を話せるようにはならないとよく聞いた)ことを認識できる。一方、日本の伝統的なグループ主義に適應できれば、アメリカ人も日本で十分にやっていけることを、日本人は認識しなければならない。現実問題としてアメリカ人がこのグループ主義に適應することは非常に難しい。我々の文化は個人が中心であり、個人の自由は尊重される。と同時に異文化をバックグラウンドに持った人も受け入れることを拒まない。日本の社会にはこういう土壤はない。

相互理解を益々深めるためには、まずこれら文化の違いに気付くこと、そして、どうせ理解し得ないと諦めてしまわないことだ。異文化間でもコミュニケーションは可能だと信じていることから、この異文化間の溝を埋める作業は始まる。

(訳:国際交流室 有川)

〔フィリップ・ウィットマン助教授の紹介〕
本学と姉妹関係にあるキャロル大学から客員教授として来学。専門は政治学、本学滞在期間中は先生の専門の研究活動が中心。滞在期間は4月～7月。

キャロル大学生本学滞在記

アン・モイラン

この6月まで、私にとって熊本は単にモンタナの姉妹県であるに過ぎませんでした。しかし、6週間ここに住んでみた今、熊本はもっと身近で、重要な存在となってしまいました。熊本はすばらしい所です。

最初の週は、熊本城、阿蘇、水前寺公園などを訪れて楽しく過ごしました。

そして、熊本商科大学、熊本短期大学のキャンパスを紹介してもらいました。北古賀学長招待の天ぶら夕食会の後、熊本滞在は勉強の面に限らずとても楽しいものになるだろうと予想することができました。そして、実際、熊本に来た本来の目的（研究プロジェクト）をつい忘れてしまうこともありました。

この大学は私の在学しているキャロル大学に多くの点で似ています。先生は素晴らしい方ばかりで、色々と非常に良くして下さいました。滞在中、幾つかの講義を受けさせて頂きましたが、先生方から暖かい歓迎を受けることができました。また、商大・短大の学生の皆さんもとても親切にしてくれましたので、沢山の新しい友達を作ることができました。みんな、積極的に話しかけてくれて私はとても楽しい日々を過ごせました。幾つかのクラブ活動も見学することが出来ましたが、メンバーの鮮やかな練習風景、意気込みには感心してしまいました。〔TLC, ESS, Tennis, Volleyball Club の皆よろしく！ やるときゃやるよ！〕

私の行ったアンケート調査に協力して下さい

った先生方、学生の皆さんには特に感謝しています。私の研究プロジェクトのレポート作成にとっても役立ちます。

また、私を家族の一員として、友人として共に過ごしてくれた3人の特別な女子学生—中村由美さん、堀和住子さん、北里邦子さんにも感謝しています。これらのホストファミリーの方々は完璧と言える位に、私の世話をして下さいました。本当にありがとうございました。

最後に、国際交流委員長の清野先生、国際交流室の桃井さん、有川さん、石坂さん（マミ）には絶大なる感謝の気持ちで一杯です。この方々がいなかったら、私は何も成し得なかったのですから。本当にお世話になりました。

私は熊本で過ごした6週間、そして、滞在中にお会いした沢山の親切な人々を決して忘れません。

（訳：国際交流室 有川）

ジョイ・レイス

6月初頭、僕は6週間熊本に滞在するんだという程度の気持ちで飛行機を降りた。

今、振り返って思うのは「僕は、熊本を訪れたのではない。熊本に住んだのだ。」ということである。熊本を訪れ、観光地をまわるだけなら誰にだってできるが、短期間に沢山のひと々と親しくなれるのはごく稀なことだ。ぼくらは、そんな機会を与えられたのだ。

熊本の人々は、この都市のすばらしい宝物である。僕は、「熊本は2つの事について有

名だ。」と聞かされていた。1つは、気候について、そしてもう1つは、女性についてである。何故これら2つの事柄がそんなに貴重であるのか、今になってみるとよくわかる。気候は、僕の住んでいるモンタナとは正反対だ。熊本は、信じられない位暑くて湿度が高い。それに比べて、モンタナはとても寒く、乾燥している。また、熊本の女性はとても優しく美しい。熊本の男性は、幸せだ！

日本（とりわけ熊本）では、素晴らしい機会を与えられ、とても楽しく過ごすことが出来た。僕は歴史を専攻しているので、過去の事柄や、過去の人々について勉強する。過去の人々のことを理解するためには、今日の人人を理解しなければならない。僕は、現代の日本人を以前より理解できるようになった。

全てが異なるという第一印象を受ける。僕は、これらの文化的相違にすぐに気付いたが、滞在期間を通して考えると、日本そして熊本の人々は、多くの点において、アメリカそしてモンタナの人々と似ている。ぼくらは、皆同じ人間なのだ。（しばしば、アメリカ人は自分達のことしか考えない傾向にある。）

熊本に住み、僕たち同様泣いたり笑ったりす

る外国人に会って、本当に素晴らしい経験をすることができた。このような留学生の交換は、国と国との間での緊張緩和や、相互理解を深めるのに大いに貢献する。全世界の平和は、人々がお互いに理解するようになって初めて達成されると信じている。

最後に僕に熊本でこんなにも有意義な生活をさせてくれた人々に感謝したい。国際交流委員長の清野先生、国際交流室の桃井さん、有川さん、そしてマミ、商大の先生方、学生の皆さん、ホストファミリーの米丸さん、山下さん、下川さんのご家族の方々、そして、熊本の皆さん、ありがとう！僕は、必ずまた戻ってきます。

（訳：国際交流室 有川）



左 アン・モイラン 右 ジョイ・レイス

深州大学(中国)から田島・中野両先生招かれる

深圳大学での夏季講座を終えて

商学部助教授 中野裕治

今夏、7月28日から9月5日まで約40日間、田島司郎教授とともに中国を訪れた。深圳大学の招聘で8月1日から3週間、企業実務家を対象に経営学の集中講義をおこなう

ためである。深圳は中国近代化のための「経済実験都市」といわれる4つの経済特別区のひとつ。なかでも最大規模を誇り、総面積327平方キロ（名古屋市の広さ）で香港に隣接している。1980年8月に特区指定を受けるまでは、人口約1万人の静かな漁村だったというが、今では人口約40万人（うち

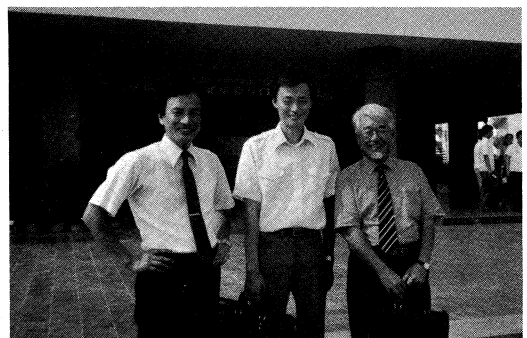
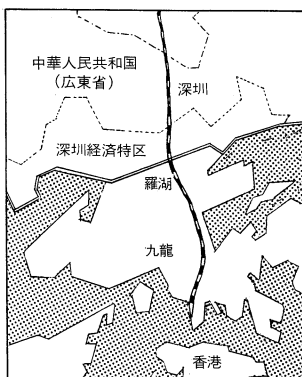
常住者20万人)、道路100Km、6階建て以上の建物2,000棟、うち18階以上のもの97棟というから、将に「一夜にして出来た近代都市」と言うに相応しい。

経済特区の目的は、低課税などの特惠政策のもとで外国資本を導入し、工場建設、製品輸出をとおして外資獲得、以って中国の経済発展に資することにある。成功すれば「内と外に広がる二つの扇の要(かなめ)」(趙紫陽総理)となる筈だという。しかし、工業生産高は年間26億人民元(約1,060億円)に達した(85年度)が、対外輸出の割合は52%とようやく半ばを超えたところ。深圳が名実共に輸出基地となるには、国際競争に耐えうる上質の製品を作らねばならない。そのためには、上質の労働力を確保し、養成するための「技術、知識、管理、対外政策」が必要となる。我々が招かれた理由もそこらへんにあったと思われる。

深圳大学はこの秋ようやく4年目を迎えた新しい大学(1983年9月設立)で、現在中国文学をはじめ人文・社会・自然科学にわたる10学科(系)を有するが、将来は文学、法学、理学、工学、経済管理の各学院を擁する総合大学へと発展する予定。学生数は目下

2,600名だが、計画完成時点では4,000名程度になるという。教授陣は、既に全国から350名程招集され、赴任している。本科(4年ないし5年)および専修科(2年ないし3年)のほか成人教育部(半工半読高等専科学院)があり、深圳地区の企業に勤務する、いわば幹部養成のための教育がなされている。我々の夏季講座は成人教育のカリキュラムの一環として組まれたものである。

講義は田島教授(労務管理論)と小生(経営学)がそれぞれ隔日で行うというものであったが、昼休みをあいだに午前9時半から午後5時半まで打(ぶ)っ通しという、通訳付きとはいえ、かなりインテンシヴであった。その割には大した疲労もなく、寧ろ現在、大変爽やかな気分で見返れるのは、新体験に伴う適度の緊張感に加えて、受講者が非常に熱心だったからの様におもわれる。実は小生昨年夏迄、本学の姉妹校モンタナ州立大学で一年間教鞭をとっており、この二年間に米国・日本・中国の三カ国で教える機会を得たことになる。それにつけても、「一体どの国の学生が一番熱心に学習するか」と自問した途端、急に気が重くなる此頃ではある。



通訳の 施 先生を間に田島教授(右)と

昭和61年度 留学生

No.	在籍身分	氏名	国籍(出身校)	受け入れ先・指導教員・研究題目
1	正規学生 私費留学生	張 琍 姫	中華人民共和国 上海外国語学院	熊本商科大学商学部 商学科第一部
2	研究生 外国政府派遣	丛 刊	中華人民共和国 広西大学	熊本商科大学商学部 経営学科 野尻 秀之
3	研究生 私費留学生	李 建 国	中華人民共和国 武漢建築材料工業学院	熊本商科大学商学部 経営学科 高井 徹雄
4	研究生 私費留学生	王 永 芳	台湾 九州東海大学	熊本商科大学商学部 商学科第一部 角松 正雄 国際マーケティング
5	研究生 県費留学生	北住 幸一	アメリカ合衆国 サイプレス大学	熊本短期大学社会科第一部 宮崎 俊策 社会福祉

国際交流委員会が
新委員でスタート!

e v e n t s

昭和61年1月より国際交流委員長及び国際交流委員が下記のメンバーに交替した。

(なお、今年度より国際交流委員長については全学的な選挙によって選任されることになった)

(敬称略)

国際交流委員長 清 野 健

国際交流委員

商学 部 中 野 裕 治

広 田 勇

経済学部 笹 山 茂

西 田 勝 喜

教 養 部 永 末 嘉 孝

堀 治 美

短 大 坂 口 周 作

中 野 いく子

事 務 局 総務課長

国際交流係

以上 11名

S61. 2. 9	第4回モンタナ短期派遣留学生離熊モンタナへ (下川克士、山下展宏、熊谷美恵子) (~4月上旬)
3. 6	昭和60年度留学生歓送会
3. 25	大田大学からの招聘教授金寛洙氏来熊 (~7月)
3. 29	清野国際交流委員長 モンタナ大学、モンタナ州立大学視察へ出発 (~4月7日)
3. 31	キャロル大学からの客員教授 ウィットマン氏来熊 (~7月)
4. 25	Up With People 来学
6. 6	第3回キャロル大学からの派遣留学生来熊 (アン・モイラン、ジョイ・レイス) (~7月)
6. 23	昭和61年度留学生歓迎会
7. 17	第2回モンタナ研修サマープログラム研修団離日 (~8月26日)
9. 1	第2回MSUからの交換教授 オコーネル氏来熊 (1年間滞在の予定)
9. 25	モンタナ大学マンスフィールドセンターからワイリー氏来学

熊本市大江2丁目5番1号

熊本商科大学

熊本短期大学

〒862 TEL.(096) 364-5161

編集：国際交流室